

因幡の白兔考

「週末寸言」

050423

「古事記」に登場する因幡の白兔、海を渡って対岸の多の前まで行きたいのだが泳げない。そこで、「吾と汝と競ひて、族の多き少きを計へむ。」などと、わに(サメ)のことで、今でも山陰地方ではこう呼ぶ。そうだ、に声をかけた。ノ！テンキなわにの一族は言われ、そのまま海中に並ぶ。兔は彼らの背の上をびよんぴよんと渡って行った。

とせし時、吾云ひつらく、「汝は吾に欺かえぬ」と言ひ竟ふる。即ち、いや端に伏せるわに、吾を捕へ、悉吾が衣服を剥ぎき。」というわけで、成功を目前にしながら皮をむかれて赤裸にされてしまつた。悪いこととはできないものだ。悪いことは人間世界にも、この白兔同様、お人好しのわにを騙して向こう岸に渡つてしまふように悪党がうんざりするほど沢山いる。ところが彼らは、白兔のようには、汝は吾に欺かえぬ。」などは決して言わない。己の悪しき意図など、まるで無かつたような顔をして、挨拶もせず、不覚に酔酩し、通行中のご婦人に悪しき行為に及んだとして現行逮捕された代議士の優位な立場を利して者と弱いて性の病的嫌疑がせ弱らう性大病的嫌疑がせ弱らう

医者。彼らは、「私は世界で一番誠実な人間です」といふ。そう顔をしていて人生をやり過ぎ。その彼らが晴天白日の下に曝け出されたのは他でもない。天網恢恢、疎にして漏らさず。天の神が巧妙に張つておいた非常線に引つかつて、おた。まことに恐るべきは天の業である。にこれにして、人を欺いて向こう岸に渡ろうとする。白兔は、何ゆえにかくも沢山の関する「古事記」の記述は、に「大国主命」の優しさを讃えるためであつた。そこで、彼の非情な兄達八十神の不親切をなじるに忙しく、白兔の悪事を叱らなかつた。そのこと、が、この国で、後々多くの「白兔」を輩出した原因になつた。のついでないだろ。縁側でうたた寝をして、一匹の兔が、陽に浮かれたか、一匹の兔が、わが家の池のほとりに迷ひ込んで来た。大急ぎで玄関から出た。雲を霞と消えていた。如し、雲を霞と消えていた。如し、池の黒豆のような糞が十数個。池の鯉は、きよんと泳いでいた。達を騙しては、池を渡つてきた。か？ 春の異動シーズン。せいぜい。わぬ顔を見つた。何食せぬ。脱が向かう岸に渡つてな。クワバクワバカもしれな。クワバクワバカもしれな。